



石井 実 (監修)

『日本の昆虫の衰亡と保護 (環境Eco選書)』

北隆館

2010年9月30日初版発行 325 pp.

われわれ虫屋ほど自然環境の変化に敏感な人種は少ないだろう。言うまでもなくそれは昆虫自体の環境の変化に対する敏感さに呼応している。近年の環境の変化とそれに伴う昆虫の衰亡は、多くの虫屋にとって目を覆うばかりのものに違いない。監修者の石井氏が最初に述べているように、日本の生物多様性は「劣化」の一途を辿っている。本書では20余名の昆虫研究者が各専門分野の現状について報告し、さまざまな解決策の提案を行っている。稀少種の生息の動向やその保全については、すでに数多の報告があるが、昆虫全般について本書ほどまとまったものはこれまでになかった。全体的に具体的かつ平易に解説されており、最新の知見のみならず、さまざまな昆虫の将来的な保全の指針ともなる内容を含んでいる。甲虫に関するものを挙げると、カブトムシ、クワガタムシ、水生種全般、ゴミムシ、ゲンゴロウ、糞虫、

外来生物、小笠原の問題などの事例が紹介されている。本書を読み進めて感じるのは、昆虫の衰亡をとりまく諸問題のあまりの根深さ、幅広さである。昔からある開発に伴う環境そのものの消失や汚染といった問題に加え、近年では、外来種問題、関連してペットとして輸入される甲虫とそれに付随する多くの問題、さらには温暖化の問題もある。また、虫屋に直接関係することとして、一部のゲンゴロウやクワガタ類などに対する採集圧の問題もある。外来種や温暖化の問題については、徒に楽観論を煽るような著作もあるが、本書を一読すれば、それらがいかに重大な誤りであるかはもちろん、現状を憂い、真摯に保全に取り組む人々への軽薄な愚弄であることもわかる。世の中に明るい話題が少なくなっているが、残念なことに、楽しい(だけであるべき)はずの昆虫採集にも牧歌的な時代は過ぎ去り、きわめて面白くない、同時に非常に深刻な問題にわれわれも向き合わなければならない時勢はますます強まっている。本書はこのような時代に昆虫採集を行う虫屋がぜひ目を通しておきたい一冊である。

(九州大学総合研究博物館 丸山宗利)

### 【短報】モンスズメバチ巣より得られたナミクシヒゲハネカクシの記録

ナミクシヒゲハネカクシ *Velleius dilatatus* (Fabricius, 1787) は、各種スズメバチ巣下に堆積した排泄物残渣を食べる掃除者として知られている(松浦 1995)。国内においては、オオスズメバチ *Vespa mandarinia* Smith, 1852 の巣から見つかることが多いが(岩田 2010)、ヨーロッパでは、モンスズメバチ *V. crabro* Linnaeus, 1758 の巣から本種の得られる例が多く知られている(Strassen 1957; Spradbery 1973)。国内において、本種がモンスズメバチ巣からの発見されるのは稀であり(松浦 1995)、データを伴った形で報告された例は少ないと思われる。

筆者らは、本種成虫をモンスズメバチの巣中より得たため、記録を公表して採集時の状況について報告したい。なお、本種の同定は Watanabe (1990) に従った。末筆ながら、文献の入手にご助力いただいた蓑島悠介氏(北海道大学大学院昆虫体系学研究室)に御礼申し上げる。

### 記録

ナミクシヒゲハネカクシ *Velleius dilatatus* (Fabricius, 1787) (図1)

2♀, 新潟県長岡市鉢伏町, 24-IX-2010, 深田純採集・岩田泰幸保管。



図1. モンスズメバチの巣から得られたナミクシヒゲハネカクシ。

図2. モンスズメバチ (♀)。

本種が得られたのは、民家天井裏に営巣された繁殖カスト生産期のモンスズメバチ(図2)巣であり、駆除完了後に回収された巣の巣盤中と残渣の中から、本種の成虫が得られた。営巣場所が暗閉所であったため、排泄物残渣の回収が十分ではなく、幼虫の生息状況を把握できなかった。

ちなみに今回の記録に似た事例として、1944年9月に、ドイツのKronberg im Taunusにおいて、屋根裏のモンスズメバチ巣からナミクシヒゲハネカクシの幼虫を多数得た例が報告されている(Strassen 1957)。

## 引用文献

- 岩田泰幸, 2010. チャイロスズメバチ巣内より得られたナミクシヒゲハネカクシについて. 甲虫ニュース, (170), 19-21.
- 松浦 誠, 1995. 図説社会性カリバチの生態と進化. 北海道大学図書刊行会, 札幌. 353 pp.
- Spradbery, J. P., 1973. Wasps: An account of the biology and natural history of solitary and social wasps. University of Washington Press, Seattle. 408 pp.
- Strassen, R. 1957. Zur Oekologie des *Velleius dilatatus* Fabricius, eines als Raumgast bei *Vespa crabro* Linnaeus lebenden Staphyliniden (Ins. Col.). *Z. Morph. Ökol. Tiere*, 46, 243-292, Abb: 1-11.
- Watanabe, Y., 1990. A revision of the Japanese species of the genus *Velleius* (Coleoptera, Staphylinidae). *Elytra*, 18, 59-72.
- (〒940-1104 長岡市撰田屋町2633-3  
ニューロンサニター(株)  
岩田泰幸・深田 純)  
(岩田: laccotrephes\_1874@yahoo.co.jp)

## 【短報】小笠原から*Eidoreus*を記録

*Eidoreus* は、テントウダマシ科の Eupsilobiinae に所属する微小甲虫で、ハワイを原記載地とする *Eidoreus minutus* Sharp, 1885 を模式種として創設された属である。

その所属をめぐっては過去に紆余曲折があり、Sharp (1885) はオオキノコムシ科の所属のもとに記載し、本属のシノニム *Eupsilobius* はカクホソカタムシ科として記載されている (Casey 1895). Sen Gupta and Crowson (1973) は、カクホソカタムシ科の総説の補遺中でテントウダマシ科の特異なものであると推定し、予測される幼虫形態について言及している。一方, Sasaji (1986) および佐々治 (1987) は、本属成虫を詳細に検討した結果、テントウダマシ科に所属するものとした。

本属の世界的な分布状況をみると、熱帯域の島嶼部を中心に広く知られ、ハワイのオアフ島のほ

か (Sharp 1908), Tomaszewska (2000) によれば、キューバ、ヴァージン諸島、グアダループ島、ガラパゴス諸島、マスカリン諸島、セーシェル諸島、スリランカ、フィジー島、フランス領ポリネシア、ソロモン諸島から知られている。

日本からは、Sasaji (1991) がツヤチビtentウダマシ *Eidoreus japonicus* を記載し、本州(静岡県)、九州(福岡県)、琉球(沖永良部島、沖縄島)から分布が知られている。筆者の手もとに小笠原諸島母島で採集された *Eidoreus* があるので記録しておく。なお、種の確定には至らなかったため、属レベルの記録にとどめておく。

6 exs., 東京都小笠原村母島中ノ平, 31. XII. 2007, 福富宏和・筆者採集。

本属は、アリとの関係性が指摘されている (Pakaluk and Ślipiński 1990; Arriaga-Verela et al. 2007 など)。上記個体も枯れ木の樹皮下に形成されたアリの蟻道内より見つかったが、アリは採集しておらず、アリの種特定には至っていない。なお、別地域での筆者自身の経験では、枯れ木樹皮下に営巣したシワアリ属 *Tetramorium* の巣内部に複数個体がいたのを観察している。

末筆ながら、採集に同行していただき、本種の標本を託された福富宏和氏(白山市)、種々ご教示をくださった上野輝久氏(福岡市)に深謝したい。



図1. *Eidoreus* sp. (背面/腹面)。

## 引用文献

- Arriaga-Verela, E., Tomaszewska, K. W., and Navarrete-Heredia, J. L., 2007. Asynopsis of the Endomychidae (Coleoptera: Cucujoidea) of México. *Zootaxa*, 1594, 1-38.
- Casey, T. L., 1895. Coleopterological notice. VI. *Annals of the New York Academy of Sciences*, 8, 451-456.
- Pakaluk, J. and Ślipiński, S. A., 1990. Review of Eupsilobiinae